

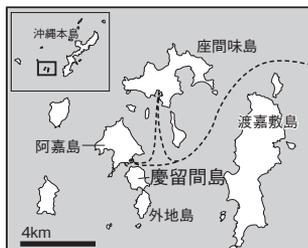
離島留学

合宿型

⑧ 慶留間島（沖縄県座間味村）——慶留間小・中学校

主体的な行動、 助け合いの心を育む島留学

慶留間島留学制度 現地代表 浅倉 大地



慶留間島：座間味村の有人島の中で最も小さく、面積1.15km²、周囲4.9kmの島。人口67人、41世帯（平成28年8月末現在）。集落はひとつで、空港のある外地島と橋で結ばれ、隣の阿嘉島とも阿嘉大橋で架橋されている。国指定天然記念物のケラマジカの生息地。

● 子どもたちと学校関係者で人口の半数を占める島

慶留間島は座間味村の三つの有人島の中でも人口が少なく、わずか六〇人程度です。そんな小さな島に小学生一〇名、中学生六名、教職員一四名が暮らしており、子どもたちと学校関係者だけで住民の半数を占めています。

地域には空き家や求人がないため、Uターンなどで移住してくる若者も少なく、子どもの数は減少傾向にあります。実際、年々島出身の子どもは減ってきています。学校があるから地域が成り立っている面もあり、まさに学校は島そのものといっても過言ではないため、住民が一体となって子どもたちを見守り、育てている現状です。

● 島と都会の子どもたち双方にメリットのある留学制度

筆者は、大学生のころから国士館大学主催の子ども向けキャンプスクールにスタッフとして参加し、座間味村を何度も訪れていました。スクールの目的は、雄大な自然の中でキャンプやシュノーケリングなどをしながらのびのびと過ごし、島の生活を体験することです。

幾度となく通ううちに、村の教育委員会などとのつながりもできました。慶留間島の現況、児童・生徒数の減少などの話をうかがっていくなかで、永吉英記国士館大学准教授（現・慶留間島留学制度代表）と筆者の「都会の子どもたちが自然豊かな離島で生活すれば、都会と離島双方の良い部分を吸収できるのではないか」という考えが、島の学校の

存続や島の子どもたちの教育にとってもプラスになる、と思いを至りました。慶留間島では、約三〇年前から委員会を立ち上げるなど学校存続に取り組んできた経緯もあります。村や住民の方々の理解と協力のもと、平成二六年度、慶留間島留学制度（以下、留学制度）を立ち上げました。

● 目標を決めて全力で取り組む一年間

留学制度では、一年間という期間を設定し、子どもたちによる集団生活を行います。対象は、小学四年生から中学二年生の児童・生徒で、定員は六〜八名程度です。留学を希望する方には、一〇月頃に東京で開かれる説明会に参加いただいた上で、一〇〜一二月の間に現地体験をしていただきます。実際に慶留間島まで親子で足を運んでいただき、島や学校の様子、実際の生活などをしっかりと確かめていただきます。その後、二月に入学試験（基礎学力、小論文、面接）を行ない、合格した児童・生徒が次年度より留学するという流れです。今年度までの三年間で一三名の小・中学生が留学をしています。

留学の一番の特徴は、子どもたち一人一人が一年間の目標を自分自身で決めて、その達成に向けて取り組んでいくことです。目標は勉強、スポーツ、趣味、研究など何でも構いません。ただし、自分で決めた目標に対しては、一年間全力で取り組むことを約束した上で留学生活に臨みます。



目標に向かって自分で取り組む留学生。

学期間内に挽回できるような、気持ちをあらためて取り組む姿勢・方法を思考する場にもなっています。

● 自ら考え、行動できる環境づくり

運営関係者側も子どもたちとの関わり方に工夫をこらしています。若いスタッフが多いため、できるだけ留学生との距離を縮め、子どもたちの気持ちをほぐし、生活しやすい環境づくりを心がけています。

一方、スタッフがリーダーシップを発揮して留学生をどんどん引っ張っていくのではなく、子どもたちに主体性を持たせ、自分自身の考えや思いを大切にしよう気を配っています。大人から見たら失敗しそうなことでも、子ども

目標達成に向けての道（プロセス）も、自分自身で組み立てます。何を、いつまでに、どのように終わらせるかの積み重ねの一年です。必然的に、いまの自分にできることは何か、どのくらいのスピードでできるのかなどを真剣に考える機会が多くなります。もちろん失敗もしますが、留



学校だけでなく、島も一体となって取り組む運動会。

の考えを尊重して応援してみたり、失敗を恐れないよう声をかけたり、子ども同士で話し合いを重ねながら生活のルールを決めさせたりと、まさに子どもが主役の留学生活といえます。

もちろん危険なことや倫理的に良くないことなどについては、指摘する場合があります。ただ基本的には、スタッフはきっかけづくりをするだけで、実際に考え、

成長していきます。多くの子どもたちが感想としてよく挙げるのは、「人と人との関わりの大切さ」「助け合いの心」「目標に向けて取り組むことの重要性」「支えてくれる人への感謝」の四つです。

小さな島なので、島の人たちは全員顔見知りです。さまざまな方が積極的に子どもたちの生活に関わってください。内地からの留学生ということで、地域の皆さんがより気にかけてくださるため、子どもたちにとってとても過ごしやすい環境です。そのためか、「東京に帰ったら、自分から積極的に人と関わっていきたい」「相手のことを思いやれるようになりたい」と話す留学生が多くいます。

台風時には皆で船を引き上げる。行事の準備や片付け、草刈りは住民総出で行うなど、慶留間島では住民同士が、当たり前のように助け合いながら生きています。留学生自身も、島の方々にはいろいろと助けてもらっており、いつもでも受け身の姿勢ではなく、今度は自分が誰かを助けあげようという気持ちで自然と醸成されるようです。

行動するのは子どもたちというスタンスです。これは野外教育の指導者（キャンパカウンセラー）の考え方と同じです。制度の運営上、苦勞している点は、留学生に主体性を持たせつつ、期間終了後に一人一人が満足した形で目標を達成できているよう、各人に合わせたスタッフ側の支援体制（工程）をつくることです。明確な答えがなく、非常に苦心しますが、やりがいを感じるところでもあります。

● 助け合いの心を育む島の住人との交流

島での生活を通し、留学生たちはたくさんのお話を学び、

留学生活ではご飯をつくったり、洗濯するなど、これまでは当然のように保護者がしてくれていたことを、自分たち自身で行わなければならず、大変な思いをします。子どもたちは、そこで保護者に対する感謝や尊敬の念をあらためて抱きます。「留学する前は言われてから渋々手伝っていたが、留学後は自分から動いて手伝いなどをするように

なった」など、保護者からの報告も届いています。

●自分の言動に責任を持つ島の生活

筆者がもつとも感じる留学生の成長は、「一歩踏み出す行動力」と「他者を受容する心」です。

自分自身で考えて動く、必要な情報を選択する、助けが必要な時は助けを呼ぶなど、難しい(面倒な)課題に直面した場合でも他人任せではなく、自ら行動を起こすことができるようになっていきます。自分の行動を自由に決められるということは、それだけ言動に責任がともなうことでもあります。同時並行で多くの仕事・役割をこなしていかなければなりません、留学生は自分自身や仲間と向き合いながら、一所懸命に生活しています。



島のレストランのシェフを招いての料理教室。

学年の近い子どもたちでの集団生活や、少人数の学校生活では、他者と意見がぶつかることや思い通りにいかないことをたくさん経験します。そんな中で「なぜ自分のことを分かってくれないのか」と誰かを責め

るのではなく、「そういう考えをする人もいるのか、なるほど」と、相手の考えを受け入れて、自分の中で整理をしてから次の行動に移していくことができるようになります。

●島の子どもの向上心を育む

留学生だけでなく、島の子どもたちにとっての効果も報告されています。勉強面・運動面などで互いに刺激し合える相手ができただけでなく、島の子どもたちの向上心につながったといえます。都会でつねに周り比べられ競争しながら育ってきた留学生と、一人一人の考えや行動を大事にしてもらいながら育ってきた



1年間の思いがこみ上げる、涙の船送り。

島の子どもたち、それぞれの良い部分をお互いが尊重し、吸収し合える関係が築けている証左だと実感しています。

また、島の自然の豊かさの再評価にも貢献しています。東京という自然がほとんどない、あつてもつくられた自然しかないような場所です。生まれ育った留学生にとって、島の自然はとても

◆島側からみた離島留学◆

座間味村は、沖縄本島那覇市から西へ約40kmの洋上に浮かぶ大小20余の島々からなる離島村です。人が住む島は、座間味島・阿嘉島・慶留間島で、それぞれに小・中学校(併置校)が設置されています。児童・生徒数(平成28年8月1日現在)は、座間味小・中学校67人、阿嘉小・中学校13人、慶留間小・中学校16人で、全校児童・生徒数は96人です。とくに阿嘉小・中学校、慶留間小・中学校は、年々児童・生徒が減っている状況にあります。

慶留間島留学制度は、島の有志の方々と国士舘大学の永吉英記准教授と研究室の学生たちとの長いつながりのなかで生まれた制度だと思います。慶留間島は、昭和62年から学校存続対策委員会を立ち上げ幾度となく危機を乗り越えてきた経緯もあり、この制度で児童・生徒が6人増えたことは大いに評価できます。また、寮の世話人として大人が2人増えたことも、地域の活性化につながっているといえます。

今後、島においては留学制度に満足することなく、この制度とタイアップしながら、より一層の地域の活性化につなげてほしいと期待しています。教育委員会では、慶留間島留学制度に対してなにか支援策ができないものか、検討していきたいと考えています。

(座間味村教育委員会 慶留間島在住 野崎 進)

浅倉大地 (あさくら だいち)

昭和63年東京都世田谷区生まれ。私立聖光学院高校を卒業後、国士舘大学体育学部に入学。野外教育の分野と出会い、大学および同大学大学院の6年間研究を行う。平成26年4月より慶留間島留学制度現地代表として慶留間島に移住。

ご期待に応えられるように、留學生生活の充実に向け努めていきます。
日本にはそれぞれに個性のある島が数多く存在します。各島の特色を活かした留学制度が普及していくよう、微力ながらお手伝いできればと考えています。 ■

魅力的です。島で生まれ育った子どもは、当たり前前の風景が、じつはとても貴重なものであることを、留學生を通してあらためて気づかされることが多いようです。

●留学制度を島の活力に結びつけたい

当面の目標は、毎年コンスタントに子どもたちを島に呼

び、留学制度が五年、一〇年と続いていくことです。将来的には、こういった取り組みを通して、地域全体に活力が宿り、人口の増加や産業の創出につながるなど、島の活性化に貢献できればと思っています。

都市部の子どもたちや保護者のなかには、この留学制度に興味を持たれる方が多数いらっしゃると思います。その方々の